

イブン・スィーナ（アヴィケンナ）の音楽論

新井裕子

イブン・スィーナ Ibn Sīnā (Avicenna, 980-1037) は、哲学者、医学者としてイスラーム世界のみならず西洋世界にも広く知られた人物である。彼が著した『治癒の書 *Kitāb al-Shifā'*』、『救済の書』には音楽について書かれた章があり、それは中世イスラームの音楽理論上重要なものとされている。本稿は、上記著作と『医学典範 *Qānūn fi'l Tibb*』の脈拍と音楽に関する箇所を用いて彼の音楽理論を再構成しようとするものである。

構成は以下のものである。史料／音楽の定義／楽音（1. 音 *sawt* と楽音 *nagham*、2. 音程 *bu'd*、2-1. 調和音程 *ab'ād al-muttafiq* と不調和音程 *ab'ād al-mutanāfir*、2-2. 音程の結合と分割、3. 類 *jins*、4. グループ *jam'*、5. 展開 *intiqāl*）／イーカーア *īqā'*（1. 定義、2. 要素と構造、3. 表示の仕方、4. 分類と種類、5. 詩と韻律論）／楽器（1. ウード上で示された音程関係、2. ウード上でのグループ）／タァリーフ *ta'līf*／今後の課題

イブン・スィーナが、アヴィケンナとして西洋世界でも知られていたことを考えると、彼の音楽論が西洋の音楽理論に何らかの影響、ないしインスピレーションを与えたとも考えることもできよう。また、彼の著作とされてきた『救済の書』の中の音楽に関する部分（とくにオックスフォード Bodleian Library 所蔵の Marsh 521 写本、フォリオ番号 159b-170b。この写本に基づいて彼の音楽論がドイツ語訳されている）が、実は彼の弟子による後世の著作である可能性が高いことも指摘した。